

大学生の職業選択に対する職業意識と親の影響との関連性

鹿 内 啓 子

目 次

- I 問題・目的
- II 方法
- III 結果
- IV 考察

I 問題・目的

大学生の最大の課題の1つは職業決定である。何らかの形で職業を決め、自分が働く場所を確保して社会に出て行くことが期待されている。職業決定の時期には個人差があり、中学生ですでに将来の仕事を決めている者もいる。しかし中学生ではまだ漠然とした夢や希望といったレベルであり、職業人として働いている自分を想像することは難しいだろう。大学生になって具体的また現実的な職業選択を行っていくと考えられるが、最近の仕事に対する積極的な構えが順調に発達せず、職業決定を回避したり不安を高めたりする大学生も多くなっている。

本研究の目的の1つは、鹿内(2005, 2006)の資料を用いて志望進路と職業意識との関連を検討することである。大学生になって志望職業を決定したとしても、それがアイデンティティの確立に裏打ちされた決定なのか、あるいは何となく決めただけのものなのか、さまざまなレベルの決定が考えられる。ここでは職業未決定状態、職業人としての自己イメージ、職業志向性の3側面から職業意識が志望職業によってどのように異なるのかを検討する。

本研究のもう1つの目的は、職業選択に対する親の影響を検討することである。鹿内(2005, 2006)では、父親についても母親についても親を望ましいモデルとして認知している大学生は職業未決定状態が低く、また決定回避傾向も弱いという結果が得られ、親が職業人や大人としての望ましい生き方を子どもに示すことが、子どもの職業意識を発達させることが明らかにされた。しかし母親を望ましいモデルとして認知することの影響が、男子大学生に対しては「決定回避」傾向を強めるという方向に作用していた。これは母親と息子の心理的な密着が男子の自立を妨げることによるものと解釈された。このように親をモデルとして認知するということが子どもの職業意識に望ましい影響と望ましくない影響を与えることが示されたが、いずれにしても子どもが認知する親の態度が職業意識に影響を及ぼしているといえる。

このような親の態度の認知は子ども(大学生)の職業選択にも影響を与えているのだろうか。子どもの職業選択に及ぼす親の影響については3つの方向が考えられる。1つは、親が子どもに就いて欲しいと期待する職業を明確にあるいはそれとなく子どもに伝えるもので、直接的な影響と呼ぶことができる。2つ目は、親の仕事に対する姿を子どもが見たり、あるいは親から仕事の話の話を聞いたりすることによって子どもが親の仕事に興味をもつようになるものである。これは親が直接的に指示や示唆を与えるわけではなく、環境の影響を受けて親の職業を継承するというもので

キーワード：大学生、職業選択、職業意識、親の影響

ある。他の1つは親の職業を継承するわけではないが、親の仕事に対する姿勢や考え方から子どもの職業意識が望ましいあるいは望ましくない影響を受けて、それが職業選択にも影響するというものである。

田中・小川(1985)は、小・中・高教師、大学教師、建築設計士という3つの専門職の55歳以上の男性を対象に、子どもへの職業継承性を検討したところ、これらの専門職についてはかなり高い割合で継承されていること、また子どもに親と同じような生き方を望んだか(親同一化)と子どもが高校2、3年の頃にどんな職業を希望または期待していたか(親の職業的期待)が職業継承の規定要因として強い効果をもつことが明らかにされた。専門職の親から子への職業継承性が高いことが知られているが、そこには親の明示的あるいは非明示的な期待の影響があることが明白である。

北原・佐々木・岡部(2005)では、看護、保育、福祉、栄養専攻の女子短大生(男子が3.9%含まれる)の職業選択と親の関与を検討しているが、看護学科では40名中8名が親から受けた影響として母親が看護師であることを挙げており、ここでも専門職の親から子への継承性の強さが示されている。

高井(2001)は、大学生を対象に、親からの社会生活上のさまざまな価値観の継承と職業の継承との関係をみている。価値の継承については、親からはっきり言われて受け継いだという「直接継承」と親の態度をみて学び受け継いだという「間接継承」とに分け、親の職業(関連した職業も含める)を受け継ぎたい(親と同種の職業の人と結婚したも含める)程度との関連性をみたところ、「間接継承」については明確な関連性はなかったが、「直接継承」については親の職業を受け継ぎたいと思う者ほど価値の継承の程度も高くなっていた。職業の継承の背後には社会生活上の道徳的な価値観や生き方という基本的なとこ

ろでの親からの影響が存在することを示唆する結果である。

上村(2005)は職業選択ではなく、選択した職業の実現化と考えられる具体的な就職活動における親の影響について、大学4年生を対象に検討している。ここでは民間企業への就職活動だけを扱っているが、これによると、親に就職活動状況を伝達する頻度が高い者はその低い者に比べて、「エントリーシートを送った企業数」、「面接など試験を受けた企業数」、「OB・OG訪問で会ったOB・OGの数」が多くなっており、親とのコミュニケーションのよさが子どもの就職活動の活発さと関連していた。また親への就職活動状況の伝達頻度が高い者はその低い者より、また親が就職に関するアドバイスをするほど、就職活動全体に対する自己評価が高いことも明らかになった。親への就職活動の伝達頻度と親からのアドバイスは高い関連を示していたが、昨今のひじょうに厳しい就職難の状況にあっては親の心理的サポートや実際的なサポートが子どもの就職活動を支えて積極的な取り組みを促し、その結果満足度を高めているといえよう。

他方、親の影響が明らかにされなかった研究もある。平石(1997)は、大学生の職業領域でのアイデンティティ探求と親子間の相互交渉との関連を半構造化面接を用いて検討したが、親が職業選択・決定に対して期待や要求をはっきりと表明していると大学生自身が認知しているのは30名中4名だけであり、子どもの主体性を尊重して任せている態度と認知している者が30名中18名と半数以上であった。また職業の探求や決定に際し親の勧めを考慮した者や親の職業を吟味または選択した者は8名であり、親の直接的な影響をまったく受けていないと認知している者が30名中22名で3分の2を占めていた。このように大学生の認知のレベルでは親の影響を受けていないと思っている者が多いが、認知されていないからといって実際に影響を受けていないと

はいえない。知らず知らずのうちに影響を受けているということが特に親子関係の場合には様々な場面でみられるであろう。

本研究では、鹿内（2005, 2006）の資料から、大学生の職業選択に対する親の影響について検討する。1つには、卒業後の方向を決める際に親の要因が志望進路によって異なった影響を与えているのかどうかを検討する。もう1つは、親の態度についての認知として、親の生き方を望ましいモデルとみなす「親モデル」、親が指図をしたり期待を表明したりする「指示」、そして仕事のことが家で話題になる「話題」の3因子の高さが志望進路によってどのように異なるのかを検討する。

II 方法

1. 調査対象者

私立大学の2年生、3年生、4年生。分析の対象としたのは、2004年の調査から男子34名、女子127名、2005年の調査からは男子61名、女子125名、合わせて男子95名、女子252名、合計347名であった。

2. 質問紙の内容

（1）職業未決定尺度

下山（1986）の「職業未決定尺度」39項目の中から、鹿内（2004）における因子分析の結果、どの因子にも負荷量が高くなかったもの、および意味的に重複すると思われるものを除いた23項目を用い、5段階評定をさせた。

鹿内（2006）における因子分析の結果、「未決定」（6項目）、「模索」（3項目）、「不安」（3項目）、「決定回避」（5項目）、「安直」（2項目）、「不安定」（2項目）の6因子が得られた。「未決定」は、自分の打ち込める仕事が見つかっておらず、そのための努力もしていない状態を表わす因子である。「模索」は、まだ自分の職業を決定してはいないが決定に向けてさまざまな経験をしており職業が

見つけられる見通しをもっている状態を示す。「不安」は、自分に合った職業決定に自信がない状態である。「決定回避」は、職業決定に意欲をもたず決定を延期したいと考えている状態である。「安直」は、生活が安定するのなら、あるいは自分を採用してくれるところならどのような職業でもよいという傾向である。最後に「不安定」は、まだ迷っていて自信と不安が交錯する状態を示す。

（2）「職業人としての自己」のイメージ尺度

将来職業に就いて仕事をしている自分を思い浮かべて、11項目の形容詞対で5段階評定させた。

鹿内（2006）での因子分析の結果、意欲的、深い、力強いなどから構成される「重厚さ」因子、やわらかい、明るい、リラックスしたから構成される「軽快さ」因子、安定した、理性的なの2項目からなる「落着き」因子の3因子が得られた。

（3）職業志向性尺度

仕事に求めていることを、19項目について5段階評定させた。因子分析の結果、次の5因子が得られた（鹿内, 2006）。自分の能力の発揮や成長を求める「能力志向」因子、職場の人間関係のよさを求める「人間関係志向」因子、挑戦の機会や責任の重さ、それに見合った報酬を求める「挑戦志向」因子、楽な仕事や収入の高さを求める「安楽志向」因子、自宅通勤や札幌圏を求める「地元志向」因子であった。

（4）親の態度認知尺度

自分に対する親の態度をどのように認知しているかを、父親と母親のそれぞれについて14項目で評定させた。父親と母親別に因子分析を行ったが、多少の項目の入れ替えがあったものの内容的には同様の3因子が得られた。親が望ましいモデルとなっており仕事についてのアドバイスもくれる「モデル」因子、親がいろいろ指図をし親からの期待を感じる「指示」因子、そして親が仕事のことを家で

話題にしたり意見を求めるといった「話題」因子であった。

(5) 職業決定の影響因

卒業後の進路や職業決定に影響を及ぼすと思われる要因14項目について、方向決定に影響する程度を5段階で評定させた。鹿内(2006)において因子分析した結果、4因子が得られた。第Ⅰ因子は授業、教員のアドバイス、友だちやインターネットなどからのさまざまな情報からなる「情報」因子、第Ⅱ因子は親のアドバイスや期待、親の仕事の「親」因子、第Ⅲ因子は自分の適性や能力・興味に合うかどうかという「個性」因子、第Ⅳ因子は身近な人の仕事である「身近モデル」因子である。

(6) 卒業後の希望進路

大学卒業後の進路について、一般企業、公務員、公務員志望だが状況によっては一般企業でもかまわない、教員、教員志望だが状況によっては一般企業でもかまわない、大学院進学、福祉施設・病院、外国留学、専門学校進学、家業を継ぐ、その他、未定の12個の選択肢の中から、1個だけ選ばせた。

Ⅲ 結果

大学生の卒業後の進路や職業選択がどのような要因と関わるのかを検討することが本研究の目的であるので、希望進路によって調査協力者を分けた。12個の選択肢から1つを選択させたが、ここでは次のようにまとめた。一般企業はそのまま「企業」、「公務員」と「公務員志望だが状況によっては一般企業でもかまわない」を合わせて「公務員」、「教員」と「教員志望だが状況によっては一般企業でもかまわない」を「教員」、大学院進学を「進学」、福祉施設・病院を「施設・病院」、未定を除くその他の選択を「その他」、未定はそのまま「未定」とした。したがって進路については7カテゴリーに分かれる。

1. 志望職業と職業未決定との関連性の検討

(1) 志望職業による職業未決定の比較

将来志望する職業によって職業未決定状態がどのように異なるのかを検討するために、志望職業を独立変数、職業未決定の6因子それぞれに従属変数とする1要因の分散分析をおこなった。表1が志望職業別の平均値と分散分析の結果である。

「未決定」では志望職業の効果が有意であった。多重比較の結果、未定は教員、公務員、施設病院、進学、およびその他よりも有意に未決定傾向が強く、また企業も教員、施設病院、進学、およびその他よりも有意に未決定傾向が強かった。未定と企業の間には有意差はなかった。「決定回避」でも志望職業の効果が有意であった。多重比較によれば、未定は教員、公務員、施設病院、進学、およびその他よりも有意に回避傾向が強い。「不安」でも志望職業の有意な効果がみられ、未定がその他より高い不安を示していた。また「安直」でも有意な効果がみられたが、多重比較ではどの志望職業間にも有意差はみられなかった。「模索」では志望職業の有意な効果の傾向がみられたが、「不安定」では有意な効果はみられなかった。

男子の調査協力者が多くなかったので、志望職業別に分類すると少数しか該当者がいないところがみられた。しかし女子についてはある程度以上の該当者がみられたので、女子だけについて同様の1要因の分散分析をおこなった。その結果は表2の通りである。「未決定」では志望職業の効果が有意であり、未定と企業は教員、施設病院、進学、およびその他よりも有意に未決定傾向が強く、また未定は公務員よりも未決定が強かった。「決定回避」でも有意な効果がみられ、未定が教員、施設病院、進学よりも決定回避傾向が強かった。「安直」でも志望職業の効果が有意となり、企業と教員がその他よりも安直傾向が強かった。また「不安定」では進路の効果は有意ではないが、教員が進学よりも高い不安定傾向を示した。

表 1 志望職業による職業未決定尺度の分散分析結果

		志 望 職 業							F 値	自由度
		企業 (70)	教員 (86)	公務員 (42)	施設病院 (36)	進学 (25)	その他 (30)	未定 (58)		
未決定	平均値	3.50	2.96	3.10	2.88	2.55	2.69	3.83	13.98***	6/340
	SD	0.92	0.85	0.86	0.74	0.88	0.88	0.58		
	多重比較の結果	企業＞教員,施設病院,進学,その他；未定＞教員,公務員,施設病院,進学,その他								
模索	平均値	2.95	2.99	2.78	2.97	2.76	2.69	3.20	2.02 ⁺	6/340
	SD	0.75	0.82	0.69	0.96	0.60	1.13	0.68		
	多重比較の結果									
不安	平均値	2.82	2.70	2.76	2.75	2.60	2.39	3.04	2.14 [*]	6/340
	SD	0.90	0.81	0.83	0.88	0.82	1.00	0.94		
	多重比較の結果	未定＞その他								
決定回避	平均値	1.94	1.89	1.80	1.72	1.60	1.77	2.23	4.66***	6/340
	SD	0.66	0.59	0.55	0.68	0.42	0.56	0.69		
	多重比較の結果	未定＞教員,公務員,施設病院,進学,その他								
安直	平均値	2.15	2.01	2.14	1.74	1.74	1.68	2.15	2.79 [*]	6/340
	SD	0.90	0.70	0.82	0.51	0.90	0.90	0.88		
	多重比較の結果									
不安定	平均値	3.14	3.25	2.96	2.96	2.82	3.12	2.97	1.36	6/340
	SD	0.79	0.82	0.84	0.86	1.04	1.13	0.82		
	多重比較の結果									

***p<.001；*p<.05；+p<.1

***p<.001; *p<.05; +p<.10

表 2 志望職業による職業未決定尺度の分散分析結果 (女子)

		志 望 職 業							F 値	自由度
		企業 (56)	教員 (52)	公務員 (24)	施設病院 (32)	進学 (20)	その他 (22)	未定 (46)		
未決定	平均値	3.61	3.01	3.03	2.92	2.54	2.67	3.81	12.00***	6/245
	SD	0.91	0.83	0.82	0.70	0.92	0.93	0.53		
	多重比較の結果	未定, 企業>教員, 施設病院, 進学, その他; 未定>公務員								
模索	平均値	2.89	2.97	2.88	3.14	2.82	2.59	3.14	1.70	6/245
	SD	0.74	0.77	0.69	0.85	0.45	1.22	0.70		
	多重比較の結果									
不安	平均値	2.90	2.71	2.92	2.78	2.67	2.50	2.98	1.12	6/245
	SD	0.89	0.83	0.87	0.85	0.87	1.02	0.87		
	多重比較の結果									
決定回避	平均値	1.92	1.80	1.79	1.74	1.54	1.75	2.17	3.61**	6/245
	SD	0.58	0.55	0.58	0.66	0.42	0.60	0.64		
	多重比較の結果	未定>教員, 施設病院, 進学								
安直	平均値	2.15	2.11	2.15	1.77	1.65	1.52	2.00	3.32**	6/245
	SD	0.85	0.70	0.89	0.49	0.89	0.76	0.71		
	多重比較の結果	企業, 教員>その他								
不安定	平均値	3.09	3.29	3.19	3.05	2.60	3.11	3.01	1.68	6/245
	SD	0.80	0.78	0.87	0.86	0.91	1.15	0.81		
	多重比較の結果	教員>進学								

***p<.001; **p<.01

(2) 性別と志望職業の職業未決定状態に対する関連性の検討

志望職業と職業未決定との関連性が性別によって異なるかどうかを検討するために、性別と志望職業を独立変数とし職業未決定得点を従属変数とする2要因の分散分析をおこなった(表3)。男子の施設病院, 進学, その他の該当者が少なかったため、志望職業は企業, 公務員, 教員, 未定の4水準とした。「未決

定」, 「模索」, 「不安」については志望職業の主効果だけが有意または有意な傾向であった。「決定回避」では性別の主効果だけが有意な傾向にあり, 女子より男子で決定回避傾向が強い。「安直」では交互作用が有意であった。図1によると, 企業, 公務員, 教員については「安直」の性差はないが, 未定では男子の「安直」得点が高くなっている。「不安定」ではどの効果も有意ではなかった。

表3 職業未決定についての性別×志望職業の分散分析結果

		志 望 職 業								職業 主効果 (F)	性別 主効果 (F)	交互作用 (F)
		企業		公務員		教員		未定				
		男 (14)	女 (56)	男 (18)	女 (24)	男 (34)	女 (52)	男 (12)	女 (46)			
未決定	平均値	3.06	3.61	3.19	3.03	2.88	3.01	3.89	3.81	11.2***	0.89	1.65
	SD	0.85	0.91	0.93	0.82	0.87	0.83	0.76	0.53			
	多重比較の結果	未定＞公務員, 教員；企業＞教員										
模 索	平均値	3.19	2.89	2.65	2.88	3.03	2.97	3.42	3.14	3.14*	0.91	1.12
	SD	0.75	0.74	0.68	0.69	0.91	0.77	0.59	0.70			
	多重比較の結果	未定＞公務員										
不 安	平均値	2.50	2.90	2.56	2.92	2.69	2.71	3.28	2.98	2.45 ⁺	0.92	1.50
	SD	0.90	0.89	0.76	0.87	0.80	0.83	1.16	0.87			
	多重比較の結果											
決定回避	平均値	2.03	1.92	1.82	1.79	2.03	1.80	2.47	2.17	4.96**	3.33 ⁺	0.39
	SD	0.95	0.58	0.51	0.58	0.64	0.55	0.82	0.64			
	多重比較の結果	未定＞公務員, 教員										
安 直	平均値	2.14	2.15	2.14	2.15	1.87	2.11	2.71	2.00	1.82	0.92	2.98*
	SD	1.12	0.85	0.74	0.89	0.69	0.70	1.23	0.71			
	多重比較の結果											
不安定	平均値	3.32	3.09	2.67	3.19	3.19	3.29	2.83	3.01	2.28 ⁺	1.41	1.56
	SD	0.75	0.80	0.73	0.87	0.88	0.78	0.86	0.81			
	多重比較の結果											

***p<.001; **p<.01; *p<.05; +p<.10

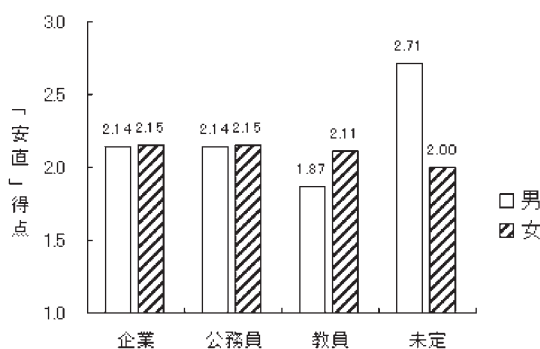


図1 性別、志望職業別の「安直」得点

2. 志望職業と「職業人自己イメージ」の関連性の検討

志望職業を独立変数とし、職業人自己イメージの3因子の得点それぞれを従属変数とする1要因の分散分析をおこなった。志望職業の効果が有意であったのは「重厚さ」だけであったが、多重比較の結果ではどの職業間にも有意な差はみられなかった。

3. 志望職業と職業志向性の関連性の検討

志望職業を独立変数、職業志向性の各因子得点を従属変数とする1要因の分散分析をおこなった。その結果、志望職業の効果が有意であったのは「安楽」だけであり、多重比較によれば企業と未定が進学よりも有意に「安楽」傾向が強かった。

職業志向性は2005年のデータにしかなく、性別の要因を加えた2要因の分散分析はサンプル数の不足のためおこなわなかった。

4. 志望職業と職業決定要因の関連性の検討

(1) 志望職業による職業決定要因の比較

志望職業を独立変数、職業決定要因の各因子得点を従属変数とする1要因の分散分析をおこなったところ、表4に示されているように、

4因子すべてで志望職業の効果が有意であった。多重比較の結果、「情報」では未定が教員、公務員、進学、およびその他よりも高得点であった。「親」については教員が企業、進学、その他よりも得点が高く、また公務員と未定は進学よりも高得点であった。また「適性」では、その他が企業、教員、公務員よりも高得点であり、また未定は公務員よりも高得点であった。最後に「身近モデル」では未定が施設病院と進学より高得点であった。

(2) 性別と志望職業の職業決定要因との関連

性別と志望職業（企業、公務員、教員、未定）を独立変数、職業決定要因の得点を従属変数とする2要因の分散分析をおこなったところ、「情報」だけで性別×志望職業の交互作用効果が有意であった（ $F=2.98$, $df=1/248$ $p<.05$ ）。男女とも未定で「情報」得点が高いが、男子では企業志望者の情報得点も同様に高く、女子では企業志望者は公務員や教員志望と同程度に低得点であった。

5. 志望職業と親の態度認知の関連性の検討

志望職業によって親の態度認知に差異があるかどうかを検討するために、性別と志望職業を独立変数、親の態度認知の各因子得点を

表4 志望職業による職業決定要因の分散分析結果

		志 望 職 業							F 値	自由度
		企業 (70)	教員 (86)	公務員 (42)	施設病院 (36)	進学 (25)	その他 (30)	未定 (58)		
情報	平均値	2.44	2.37	2.28	2.67	2.25	2.23	2.77	4.00**	6/340
	SD	0.70	0.75	0.70	0.69	0.52	0.74	0.73		
	多重比較の結果	未定>教員, 公務員, 進学, その他								
親	平均値	2.31	2.82	2.72	2.32	1.96	2.22	2.68	6.02***	6/340
	SD	0.77	0.90	0.84	0.83	0.74	0.96	0.83		
	多重比較の結果	教員>企業, 進学, その他; 進学<公務員, 未定								
適性	平均値	3.68	3.78	3.48	3.93	4.04	4.32	4.06	5.29***	6/340
	SD	0.81	0.71	0.83	0.70	0.75	0.91	0.71		
	多重比較の結果	その他>企業, 教員, 公務員; 未定>公務員								
親近モデル	平均値	2.56	2.56	2.64	2.00	1.88	2.43	2.79	3.26**	6/340
	SD	1.10	1.18	1.19	0.99	1.09	1.41	0.99		
	多重比較の結果	未定>施設病院, 進学								

** * $p<.001$; * * $p<.01$

表5 母親の態度認知についての性別×志望職業の分散分析結果

		志 望 職 業								職業 主効果 (F)	性別 主効果 (F)	交互作用 (F)
		企業		公務員		教員		未定				
		男 (14)	女 (56)	男 (18)	女 (24)	男 (34)	女 (52)	男 (12)	女 (46)			
母 モ デ ル	平均値	3.50	3.29	2.79	3.65	3.30	3.73	3.01	3.25	2.57 ⁺	8.14 ^{**}	3.42 [*]
	SD	0.80	0.86	0.88	0.67	0.81	0.72	0.79	0.78			
	多重比較の結果	教員>未定										
母 話 題	平均値	1.93	2.83	2.20	3.10	2.56	3.00	2.75	2.83	2.01	18.10 ^{***}	1.87
	SD	0.74	0.99	0.86	0.95	0.89	0.91	1.23	0.93			
	多重比較の結果											
母 指 示	平均値	2.77	2.67	2.58	2.76	2.60	2.62	2.52	2.54	0.42	0.07	0.19
	SD	1.03	0.80	0.67	0.78	0.79	0.91	0.82	0.81			
	多重比較の結果											

***p<.001; **p<.01; *p<.05; +p<.10

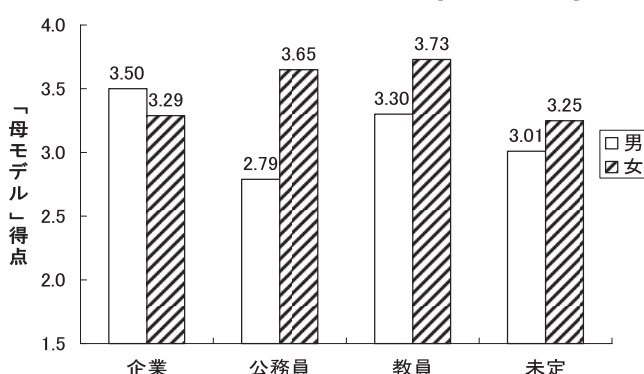


図2 性別、志望職業別の「母モデル」得点

従属変数とする2要因の分散分析をおこなった。親子関係では同性の親との関係と異性の親とのそれではかなりの違いがあると思われるので、この性別を独立変数に含めた分散分析しかおこなわなかった。

父親の態度認知については「モデル」、「指示」、「話題」のいずれの因子得点においても、性別の主効果、志望職業の主効果、また性別×志望職業の交互作用効果も有意ではなかった。しかし母親の態度認知については、「母モデル」で性別の主効果と交互作用効果が有意となり、「母話題」で性別の主効果が有意となった。表5に各条件の平均値と分散分析の結果を示した。「母モデル」では図2に示したように、企業を除いて男子より女子の得点が高い。また未定では性差がほとんどない

のに対して公務員と教員では男子より女子で得点が高く、とくに公務員では男女差が大きくなっている。男子の公務員志望者では「母モデル」得点が高めの条件に比べて低くなっている。「母話題」では全般的に男子より女子で得点が高いが、女子では職業による差異がないのに対し、男子では企業で低く未定で高くなる。未定では性差がなくなっている。

IV 考察

1. 志望職業と職業意識との関連

志望職業が決まっているかどうか、また決めている場合にも志望職業によって職業意識が異なることが明らかにされた。

企業志望、公務員志望、教員志望、施設病

院志望、進学志望、その他を志望、未定の7カテゴリーで比較をすると、まだ目指す職業が決まっていない未定の大学生は、それが決まっている者に比べて職業未決定尺度の「未決定」が強いが、これは当然の結果である。しかし同時に未決定者は教員、公務員、施設病院、進学、その他の志望者よりも「決定回避」が強かった。また気楽にできる仕事、休日の多さや残業の少なさ、高い収入を求める傾向である職業志向性尺度の「安楽志向」も進学志望者に比べて強くなっている。これらを考え合わせると、未定が今はまだはっきりと卒業後の方向を決めていないが積極的にそれを探し求めているという状態ではなく、将来の職業について考えようとする意欲をもたず職業決定を延期しようとする消極的なモラトリウム状態にあるということができる。

職業未決定尺度の「安直」因子で性別と志望職業（企業、公務員、教員、未定の4水準）の交互作用が有意であったが、これは未定の男子だけが「安直」傾向が強いことによるものであった。女子は志望職業やその有無に関わらず、また志望職業を決めている男子も「安直」得点は低かった。女子に比べて男子に対しては職業に就くことへの圧力が強いいため、志望職業を絞ることができない男子はどのような職業でもいいからとりあえず就職をしたい（しなければ）という「安直」傾向が強くなると解釈できる。

志望職業の未定者と決定者との間に職業意識の差がみられるだけでなく、決定者の間にも志望職業によって職業意識の差異がみられた。企業志望者は「未決定」傾向や「決定回避」傾向において未定者との差がなく、とくに「未決定」傾向は教員志望、施設病院志望、進学志望、その他志望よりも有意に強かった。また職業志向性尺度の「安楽志向」が進学志望よりも有意に強くなっていた。教員、福祉施設や病院の職員、大学院進学では、その仕事や勉強の内容が明確であるのに対し、企業

志望の場合は航空会社の客室乗務員や旅行会社のツアーコンダクターのように特定の職業をすでに決定している人もいるであろうが、多くは一般企業という大きな枠だけを決めどのような仕事（企業）に絞るかはこれからの課題としていると考えられる。したがって自分が目指す職業がまだ見つかっておらず、仕事の確かなイメージももっていないという「未決定」状態が企業志望で強いのであろう。

女子だけについて志望職業による「職業未決定」尺度の分析をしたところ、企業と教員はその他より「安直」得点が高く、また「不安定」得点も教員は進学よりも有意に高いという結果が得られ、教員志望が特徴的な様相を示した。教員志望の「未決定」傾向と「決定回避」傾向は強くないことを考え合わせると、教員志望の「安直」や「不安定」は職業意識の低さを示すものではなく、今日の厳しい教員採用状況から強い教員志望をもっていても実際に教員になれる可能性は高くないため、気持ちが揺れ動き、また教員になればどのような学校でもどこでもいいと思うのであろう。

2. 職業選択に及ぼす親の影響

志望職業を要因とする職業決定要因についての分散分析の結果、「親」得点について教員志望は企業、大学院進学、その他志望に比べ有意に高いという結果が得られた。また大学院進学は公務員志望および未定に比べて「親」得点が低かった。「親」因子は、「親のアドバイス」、「親の期待や希望」、「親の仕事」の3項目から構成されているが、親のアドバイスや期待は直接的な影響であり、親の仕事は親の職業の継承ということができる。親の中で大学院修了者は少なく、大学院についての知識も少ないためアドバイスを与えることもあまりないであろう。したがって大学院進学の選択に対して親の影響が弱いことは十分考えられることである。これに対して教員志

望の場合は、大学院進学はもちろん一般企業志望よりも親の影響が強いという結果であった。田中・小川(1985)では、親が教員の場合実際に子どもに職業が継承される傾向が強いことが示された。また小川・田中(1979)では父親の職業、息子の認知による息子への職業期待、そして男子の希望職業との関連を検討しているが、小・中・高の教員である父親は息子に教員の継承を期待していると認知され、また息子自身も教員を希望する割合が高かった。20数年後の今日でも教員という職業の継承性の強さは変わらないといえる。また小川・田中(1979)では父親・息子間の継承性を扱っているが、本研究では調査対象者の73%が女子である。ここでは父親の要因と母親の要因を区別していないが、教員の継承性が娘にも見られるといえよう。

母親の態度認知における「母モデル」得点について、性別×志望職業の交互作用が有意であった。企業と未定では「母モデル」得点の性差はみられないが、公務員と教員については男子より女子で「母モデル」得点が高くなっている。男子の公務員志望者ではこの得点が低い。教員や公務員は企業に比べ専門性の高い職業であり、とくに今は採用試験が厳しい状況なので志望動機が高くまた採用試験への準備にもかなりの労力を費やす覚悟が必要である。女子の場合には以前から教員と公務員は男子と対等の条件で結婚や出産後も継続できる仕事と考えられてきた。母親を自分の生き方の望ましいモデルと認知できている女子は望ましい職業意識をもっている(鹿内, 2006)ことを考えると、このような高い職業意識を形成し、その結果専門性の高い職業を選択するようになると考えることができる。もちろん教員あるいは公務員である母親をモデルとした結果、母親の職業を継承することになったという可能性もあるが、ここでは母親の職業については調査されていないので、この点は今後の課題である。

[引用文献]

- (1)平石賢二 1997 大学生の職業的アイデンティティの探求と親子間相互交渉 三重大学教育学部研究紀要, 48, 177-187.
- (2)上村和申 2005 大学生の就職活動における両親の影響に関する一考察 明治大学大学院政治学研究論集, 21, 35-54.
- (3)北原佳代・佐々木美樹・岡部恵子 2005 職業選択に対する学生の考え方と親への相談状況との関係—新入生を対象として— つくば国際短期大学紀要, 33, 121-139.
- (4)小川一夫・田中宏二 1979 父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 27, 45-54.
- (5)鹿内啓子 2005 大学生の職業決定に関わる親の態度認知と職業人イメージの要因 北星学園大学文学部北星論集, 42, 69-88.
- (6)鹿内啓子 2006 大学生の職業未決定に関わる要因の検討—未決定型による比較— 北星学園大学文学部北星論集, 43, 133-148.
- (7)下山晴彦 1986 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.
- (8)高井直美 2001 大学生における親の価値の継承 京都ノートルダム女子大学研究紀要, 31, 147-156.
- (9)田中宏二・小川一夫 1985 職業選択に及ぼす親の職業的影響—小・中学校教師・大学教師・建築設計士について— 教育心理学研究, 33, 75-80.

[Abstract]

A Study of Occupational Readiness and the Influence of Parents Related to Career Choice of College Students

Keiko SHIKANAI

This study investigates how occupational readiness and the influence of parents relates to the career choice of college students. Male and female students were divided into 7 groups according to career choice: private corporation worker, public service worker, teacher, welfare institution worker, graduate student, any other choice, and students who were undecided. The occupational readiness of students who want to be a private corporation worker and students who were undecided was inferior to students who want to be a teacher, a welfare institution worker, a graduate student, and students with any other choice. Career choice to be a teacher was most influenced by parents. Female students who want to be a teacher or a public service worker were modeling more strongly after their mother than male students who aim at the same occupations and female students who aim at other occupations.

Key Words: Career Choice, Occupational Readiness, Modeling after Parents, College Students